

## 平成27年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

- 学びに向かう意欲を高め、自己実現に導く学校
- 確かな信頼関係を基盤に豊かな人間力を育む学校
- 先進的、先導的な教育実践に教育センターと一体となって取り組むナビゲーションスクール

## 2 中期的目標

## ナビゲーションスクールとしての確立に向けて



## 1 新たな学びの創造

- (1) 「学びのクローバー」に配された「発見」「探究」「感動」「自信」をキーワードに授業改善に取り組む。
- ア アクティブラーニングを授業に導入し、生徒の能動的な学習を図る。また、PISA型学力の育成をめざした授業づくりを行い、考える力の育成を図る。
  - イ 探究ナビを教育活動の柱とし、生徒の力を最大限に引き出す授業づくりに取り組む。
- ※自己診断アンケートで「頑張ろうと意欲をかき立てられる授業がある」(平成26年度54%)を毎年5%引き上げ、平成29年度には70%にする。

## 2 教育センターと一体となった授業研究

- (1) 先進的・先導的な授業実践や授業研究を教育センターと共同で行い、他の府立高校にその成果を発信する。
- ア 外部機関と連携した多彩な授業プログラムの開発を行い、生徒の学習意欲の向上を図る。
  - イ すべての教科で観点別学習状況評価についての研究・実践を行い、成果を府立学校へ発信していく。
- (2) 次期教育課程の改定を見すえ、教育課程特例校の指定を受けた探究ナビを教科横断型の教科として研究・実践を行う。
- ア 評価手法を確立する。
- ※平成29年度には、すべての教科で観点別シラバスを生徒に示し、評価を行う。

## 3 生徒の自己実現を叶える学校

- (1) 生徒が見守られ感を感じる学校作りを行う。
- ア 多面的、総合的に生徒をサポートする学校組織体制の構築を行う。
  - イ 人権教育を基盤とした生徒指導と細やかな生徒観察により、課題の早期発見に努める。
  - ウ 教育支援委員会を中心に、支援の必要な生徒を早期に把握し生徒の指導計画について検討し、本人も保護者も安心して学校生活を送れるようにする。
  - エ 全職員への情報の共有と共通理解を深めるためにケース会議を定例化させる。
- (2) ガイダンス機能の充実と自ら学ぶ生徒を育成する。
- ア 自分の進路に目標をもち、努力する生徒を育てる。
  - イ 自学自習の習慣をつける。
  - ウ 進路希望を実現させる。
- (3) 自己有用感を醸成し、学校への帰属意識を高める。
- ア 生徒会活動の活性化を図る。
  - イ 部活動の活性化を図る。
  - ウ 基本的な生活習慣の確立と規範意識の醸成に努める。
  - エ 広報活動を充実させる。
- ※自己診断アンケートで「自分は大切にされていると感じることがある」(平成26年度65%)を毎年5%引き上げ、平成29年度には80%にする。  
近畿大学など関西中堅大学の合格者数を、毎年前年度の2倍にし、平成29年度には50人以上にする。

## 4 教員力の育成

- (1) 経験年数の少ない教員の育成を図る。
- ア 経験年数の少ない教員を中心とした校内研修組織を確立する。
  - イ 同僚性を育成する。
- ※自己診断アンケートで「教員間でお互いの授業を見学する機会があり、授業について意見交換するなど自律的な風土がある」(平成26年度68%)を毎年5%引き上げ、平成29年度には83%にする。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 28 年 1 月実施分]	学校協議会からの意見																				
<p>【生徒向け】</p> <p>質問項目の 22 項目中、肯定的回答が 7 割以上のものは、次の 8 項目で、本校の特色あるコミュニケーション能力の育成、協同する喜びの体験とともに、自己肯定感もたせることができたことが反映された結果といえる。さらに、安全で安心な学校づくりに向けては、居場所づくり、人権教育の推進への向上が反映されたものとなっている。肯定的な回答が 7 割に満たないものの中にも、また、昨年を上回り、わずかに 7 割に満たなかった項目 3 つは、すべて生徒への教員の働きかけに関する項目で、生徒が教員に大切にされていると感じていると言える。</p> <p>【教職員向け】</p> <p>校内授業研究委員会では評価の方法やあり方について、教育センター指導主事と協力することによって、各教科での実践を進めた。その結果、「授業で考える力を育成するために指導方法の研究や改善に努めた」という項目の肯定的評価 83%と、基礎学力をもとに「考える活動」を取り入れようとしていることがよくわかる。また、生徒の情報の共有・教育相談体制の整備についても評価が高く、一人ひとりを大切にした指導について、教員の意識が高くなっていることを示している。</p> <p>【保護者向け】</p> <p>16 項目のうち 13 項目が前年度を上回っている。行事や P T A 活動を中心として保護者と学校との連携が進んだことがあり、保護者の期待や相談に 대응できているとともに学校の方針や取組に理解を示していただいている結果と考える。</p> <table border="1" data-bbox="86 1172 1003 1344"> <thead> <tr> <th>アンケート項目(生徒)</th> <th>H26</th> <th>H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。</td> <td>68%</td> <td>68%</td> </tr> <tr> <td>先生は真剣に自分の事を考えて指導してくれる。</td> <td>65%</td> <td>69%</td> </tr> <tr> <td>部活動に参加して得ることがあった。</td> <td>64%</td> <td>68%</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" data-bbox="86 1380 1003 1670"> <thead> <tr> <th>アンケート項目(教職員)</th> <th>H27</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>授業で考える力を育成するために、指導方法の研究や改善に努めている。</td> <td>83%</td> </tr> <tr> <td>生徒に関する情報などを共有する機会があり、共通理解が得られている。</td> <td>92%</td> </tr> <tr> <td>教育相談体制が整備されており、生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる。</td> <td>100%</td> </tr> </tbody> </table>	アンケート項目(生徒)	H26	H27	悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。	68%	68%	先生は真剣に自分の事を考えて指導してくれる。	65%	69%	部活動に参加して得ることがあった。	64%	68%	アンケート項目(教職員)	H27	授業で考える力を育成するために、指導方法の研究や改善に努めている。	83%	生徒に関する情報などを共有する機会があり、共通理解が得られている。	92%	教育相談体制が整備されており、生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる。	100%	<p>第 1 回学校協議会 平成 27 年 6 月 24 日実施 OH27 年度学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校設定科目「探究」の授業は、本校の特色の一つである PISA 型学力を身に付けるうえで重要な役割を果たしている。また、そのカリキュラムについても、これまでの実践から一定形づくられている。この成果を保護者へ発信するために、保護者向けの「探究」の授業というのを実施したらどうか。</li> <li>授業外の活動として、講習や補習が教員及び生徒の日常となり、成果を出している。</li> <li>教育センター附属高校で実施される研究授業については、実施について広くアナウンスを行い、大阪府の教育実践を先導する授業として発信するべきである。</li> </ul> <p>第 2 回学校協議会 平成 27 年 11 月 18 日実施 OH27 年度学校経営計画の進捗について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>シラバスを生徒にわかりやすく示すことが重要である。もう少し提示する方法について検討する必要がある。</li> <li>観点別学習状況をどのように測定するのかについて、研究と実践を深めることが必要である。</li> <li>研究授業を実施するときには、広く広報をするべきである。少なくとも協議会の委員には案内を送ってほしい。</li> </ul> <p>第 3 回学校協議会 平成 28 年 2 月 10 日実施 OH27 年度学校経営計画と評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート結果は、良く考えて書くことで自己評価が厳しくなることが多い。実態と合わせた、細かい分析が必要である。</li> <li>授業以外の学習時間を調査するときに、授業時間以外についても学習時間として調査する方が実態把握に合っている。</li> <li>文字を読んで調べることができることと一生の宝物になる。是非、図書館の充実に力を入れてほしい。</li> <li>生徒アンケートの中に「がんばろうと意欲をかき立てる授業がある」という指標があることはとても良い。この指標を高めてほしい。</li> <li>発信力を持って、学校の成果を発信させてほしい。</li> </ul>
アンケート項目(生徒)	H26	H27																			
悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。	68%	68%																			
先生は真剣に自分の事を考えて指導してくれる。	65%	69%																			
部活動に参加して得ることがあった。	64%	68%																			
アンケート項目(教職員)	H27																				
授業で考える力を育成するために、指導方法の研究や改善に努めている。	83%																				
生徒に関する情報などを共有する機会があり、共通理解が得られている。	92%																				
教育相談体制が整備されており、生徒は学級担任以外の教職員とも相談することができる。	100%																				

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
新たな学びの創造	<p>(1) 授業改善に取り組む</p> <p>ア アクティブラーニングの導入とPISA型学力の育成をめざした授業づくり</p> <p>イ 探究ナビの成果を一般教科へ</p>	<p>(1) 「学びのクローバー」に配された「発見」「探究」「感動」「自信」をキーワードに授業改善に取り組む。</p> <p>ア・「授業研究委員会」が立てた授業研究の年間計画にそって授業改善に取り組む。「授業公開期間」を設けるなど、教科が主体的に授業改善に取り組む仕組みをつくる。その中で、アクティブラーニング、考えさせる授業、活用型の授業、反転学習等の研究・実践を行う。</p> <p>イ・ 探究ナビを担当と副担で担当するなど、探究に関わる人数が大幅に増やす。その手法や実践を、各教科で活かす方法について研究・実践を行う。</p>	<p>ア・すべての教科で研究授業を実施する。</p> <p>イ・自己診断アンケートで「頑張ろうと意欲をかき立てられる授業がある」の肯定的回答を59%以上（平成26年度54%）</p>	<p>ア. 授業研究委員会から示された年間計画に基づいて、月1回の会議で情報の共有をしつつ、各教科で授業改善に取り組んだ。6月と11月の授業研究月間において、全教科が研究授業を実施した。各教科それぞれ、活用型授業等のパフォーマンス課題を考え、思考力・判断力を伸ばす授業を行い、ルーブリックを用いた評価も実施した。(○)</p> <p>イ. 担当者は、昨年度20人が38人と約2倍の教員が担当した。担当が増えたことによる課題もあるが、多くの手法を経験することでALに慣れることができることが成果であった。自己診断アンケートで「頑張ろうと意欲をかき立てられる授業がある」の肯定的回答は51% (△)</p>
教育センターと一体となった授業研究	<p>(1) 先進的・先導的な授業実践や授業研究を教育センターと共同で行う</p> <p>ア 外部機関と連携した多彩な授業プログラムの開発</p> <p>イ 観点別学習状況評価についての研究・実践の実施</p> <p>ウ 府立高校への発信</p> <p>(2) 探究ナビを教科として研究・実践</p> <p>ア 評価手法を確立する。</p>	<p>(1) 先進的・先導的な授業実践や授業研究を教育センターと共同で行い、他の府立高校にその成果を発信する。</p> <p>ア・NIEの事業や外部機関、外部人材を活用した授業を、現在行われている教科以外にも拡大する。すべての教科で実施する。</p> <p>イ・教育センターと「授業研究委員会」が連携し、年間計画の中に、「校内研修」や「授業研究月間」「研究授業・研究協議」を組み込む事で、各教科、各自の授業研究が年間を通して計画的に進行させる。観点別学習状況評価を、シラバスに基づき、1年生で実践しながら授業改善を行う。2年生は、次年度シラバスを作成しながら、同時に授業改善を行う。</p> <p>ウ・各教科の、観点別学習状況評価を含んだシラバスによる授業実践を、教育センターでの教育課程説明会で発表する。</p> <p>(2) 次期教育課程の改定を見すえ、教育課程特例校の指定を受けた探究ナビを教科横断型の教科として研究・実践を行う。</p> <p>ア・シラバスを再構成し、指導と評価の一体化を図る。</p> <p>・各時間、單元ごとのルーブリックを作成し、有効でありかつ簡素な評価方法を確立する。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・すべて教科で実施する。</p> <p>イ・生徒向け授業アンケートの「知識や技能が身に付いたと感じる」の学校平均を、3.3以上（平成26年度3.1）</p> <p>ウ・すべての教科で授業実践についての発表を行う。</p> <p>(2)</p> <p>ア・他校でも利用できるようなシラバスを完成させる。</p> <p>・試験以外で図る学力の評価方法を確立させ、公表していく。</p>	<p>(1)</p> <p>ア. 今年もNIEの事業で、新聞記者を招く授業を2回国語表現で実施、政経でも新聞を活用する授業を行い、大阪NIEセミナーで発表した。他にも理科での博物館連携授業、家庭科でも10回以上の外部連携授業を実施するなど活発に実施されたが、ほとんどの教科で実施することができた。(○)</p> <p>イ. 年度初めに、課題と年間計画を示し、それに従い3回の「校内研修」、2回の授業研究月間、各教科2回の以上の研究授業及び研究協議を実施、各教科の授業研究が進んだ。1年生に学習評価を含めたシラバス集をオリエンテーションで配付し、それに基づき、観点別学習状況評価を行った。2年次のシラバスは完成した。「知識・技能が身に付いたと感じる」の学校平均は3.2であった。(○)</p> <p>ウ. 観点別学習状況評価を含んだシラバスに基づく授業実践の発表を、8月の教育課程協議会において、すべての教科で実施した。(◎)</p> <p>(2)</p> <p>ア. 1年生は昨年度作成したシラバスを元に授業を行った。シラバスはホームページに公開し、他校でも利用できるようにしている。実技教科を中心にルーブリックを作成し評価を行った。(○)</p>

## 府教育センター附属高等学校

生徒の自己実現を叶える学校	<p>(1) 見守られ感を感じる学校作り ア 生徒をサポートする学校組織体制の構築 イ 生徒指導と細やかな生徒観察により、課題の早期発見 ウ 安心して学校生活を送る エ ケース会議の定例化 (2) ガイダンス機能の充実と自ら学ぶ生徒の育成 ア 目標をもち、努力する生徒の育成 イ 自学自習の習慣づけ ウ 進路希望の実現 (3) 自己有用感と帰属意識の醸成 ア 生徒会活動の活性化 イ 部活動の活性化 ウ 基本的な生活習慣の確立と規範意識の醸成 エ 広報活動の充実</p>	<p>(1) 生徒が見守られ感を感じる学校づくりを行う。 ア・教育相談委員会と教育支援委員会、さらに人権教育推進委員会の3輪で、生徒をサポートする体制を構築する。 イ・上記の3委員会に、生徒指導部の教員が参加する。また学校全体で生徒観察を細やかにし、課題を早期に発見し、共有し、取り組むことのできるように、情報の共有を学年会や職員会議で行う。 ウ・生徒の安心を脅かす事象の早期発見を行うために、職員室を生徒の小さな変化を話せる場所にする。 ・ほめる指導を引き続きおこなう。 エ・定例の生徒支援委員会、生徒相談委員会を持つ。またスクールカウンセラーと協同してケース会議を行う。 (2) ガイダンス機能の充実と自ら学ぶ生徒を育成する。 ア・進路資料の整理を行い、新タイプ自習室のガイダンス機能を、本格実施させる。 ・各教科の講習や添削指導への参加者を学年と連携し直接生徒に呼びかけるなど工夫して増やし、かつ継続させる。 イ・数学科の自学自習の取り組みの効果を他教科にも広げ、予習をする事が当たり前になるようにする。 ・すべての学年で、夏休みに勉強合宿を実施する。1学年は、高校生としての学習習慣、2学年は、授業と並行して1年の復習を実施する習慣、3学年は、受験生として自ら計画的に学習する習慣がつくよう指導する。 ウ・大学個別の情報を分析し、生徒の進路希望を実現させる支援をおこなう。 (3) 自己有用感を醸成し、学校への帰属意識を高める。 ア・創立5周年を記念して、「創立記念祭」として体育祭や文化祭に取り組みさせる。 ・地域の活動に積極的に関わる。 イ・部活動加入率を維持させるとともに生徒の居場所の一つにする。 ・活動状況を共有し、生徒間で刺激しあう ウ・現在の遅刻指導を続けながら、遅刻者を減らす。 エ・入試制度の改編に合わせ、学校を理解してもらえよう広報活動を行う。</p>	<p>(1) ア・保護者向け自己診断アンケートの「学校は、生徒をきめ細かく、多面的にサポートしている。」の肯定的回答が75%以上(平成26年度70%) イ・生徒向け自己診断アンケートの「自分は大切にされていると感じることがある」の肯定的回答が70%以上(平成26年度65%) ウ・生徒向け自己診断アンケートの「学校生活の中で自分が認められたり、ほめられたりすることがある。」の肯定的回答が73%以上(平成26年度68%) エ・生徒向け自己診断アンケートの「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。」の肯定的回答が72%以上(平成26年度67%) (2) ア・ガイダンス機能を果たす。 ・参加者数を前年度の1割増 イ・学習時間の1割増 ウ・近畿大学など関西中堅大学の合格者数を15人以上 (3) ア・生徒向け自己診断アンケートの「自分の学校生活は充実していて、入学して良かったと思っている。」の肯定的回答が87%以上(平成26年度84%) イ・部活動加入率70%以上を維持させる。 ウ・学校全体の遅刻数を前年度の1割減 エ・志願者数を前年度より増加させる。</p>	<p>(1) 担任会・生徒指導部会・教育相談委員会・支援委員会・人権教育推進委員会がそれぞれに機能することで面となって機能し、またスクールカウンセラーとの協同で複数の目で生徒を守ることができた。 ア. 保護者向け自己診断アンケートの「学校は、生徒をきめ細かく、多面的にサポートしている。」の肯定的回答が72%(○) イ. 生徒向け自己診断アンケートの「自分は大切にされていると感じることがある」の肯定的回答が65%(△) ウ. 生徒向け自己診断アンケートの「学校生活の中で自分が認められたり、ほめられたりすることがある。」の肯定的回答が64%以上(△) エ. 生徒向け自己診断アンケートの「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生がいる。」の肯定的回答が68%(○) (2) ア. 新タイプ自習室の資料の充実や学習機の仕切り作成による個別の学習空間確保が実現した。グループ学習用の空間、ガイダンスのための空間も確保し、環境は良くなりつつある。参加者数は、833人から1146人と4割増えている。(○) イ. 学習時間は1割増しているものの、ほとんどしていない生徒があまり減っていないことが課題である。(○) ウ. 合格者数は18人であった。(○) (3) ア. 行事に関するアンケートでは90%以上が肯定的意見であった。また、今後の発展や展望まで生徒主体でまとめるなど、意欲的な姿勢の育てることが出来た。自己診断アンケートの「自分の学校生活は充実していて、入学して良かったと思っている。」の肯定的回答が82%(△) イ. 延べ人数での加入率は72%となったが、兼部や途中退部した生徒を除く、実質のクラブ加入率は68%であった。(○) ウ. 昨年比2割減である。(◎) エ. 学校の特色を伝えるために、中学校への訪問を行っているが、過去の志願者数の増減を参考にし、急減した学校へ重点的に訪問をする計画を実施した。入試制度の改変はあったが、広報の効果もあり、本校の特色を理解していただくことができたことと評価している。前年度359名の志願者が本年度は332名である。(○)</p>
教員力の育成	<p>(1) 経験年数の少ない教員の育成 ア 経験年数の少ない教員を中心とした校内研修組織の発展 イ 同僚性の育成</p>	<p>(1) 経験年数の少ない教員の育成を図る。 ア・授業構築についての研究活動を授業研究委員会とは異なる組織「パワーアップ27」で行う。 ・教師力アップのための研修会を実施する。 イ・教科指導担当以外に相談担当をつけ、疑問の解消を図る。</p>	<p>ア・パワーアップ27の実施状況 ・学期に1回以上の実施 イ・聞き取りにより検証する。</p>	<p>ア. 1学期5回、夏休み3回、2学期5回に実施であった。(ただし全体研修は省いている)。(◎) イ. 疑問の解消には、話をする交流の場を設ける方が効果的であったことが、聞き取りから分かった。交流の場で、話をする機会が少ない教員とも話ができることが大きい。(△)</p>